

研究ノート

相談援助実習における 実習前評価システムの検討 —面接技術試験を受けた学生へのアンケート調査から—

An Examination of the Pre-Practicum Evaluation System in
Social Work Practice

-A Questionnaire Survey of Students Who Took the Interview Skills Test-

長濱章雄 栗田克実 任 賢宰 宮下史恵

Akio NAGAHAMA, Katsumi KURITA, Hyunjae LIM and Fumie MIYASHITA
旭川大学保健福祉学部コミュニティ福祉学科

キーワード：相談援助実習，実習前評価システム，面接技術試験

抄 録

本研究は、相談援助実習における面接スキルを担保するための実習前評価システムを検討する目的で、実習前の段階において面接技術試験を実施し、面接に臨む学生の意識から得られた学修成果について、インターネット調査の結果から分析を試みた。

調査の結果、学生が面接技術試験の目的を理解し、その必要性を受けとめて試験に臨んでいることが明らかとなった。試験を実施したことの効果として、自身の弱点や強みを理解できたこと、相談援助実習に臨むにあたり学修意欲の向上につながり、面接技術試験の体験が、相談援助実習中に展開される面接の場面において活かされていると学生が感じていたことが明らかとなった。

また、面接技術試験を受けた学生の回答から、技術面における課題を感じる傾向が示され、面接技術の事前教育における課題を把握することができた。また、新カリキュラム以降のソーシャルワーク実習教育は、実践現場との連携をより強化して実施していく必要があることが示唆された。

I. はじめに

社会福祉士の国家資格取得のために欠かせない教育として福祉現場における相談援助実習（以下、実習）体験がある。実習体験の充実が社会福祉士像のイメージアップ及び将来への目標に大きな影響を与える機会ともなり得る。実習及び実習前後における教育の充実に資する一環として、学生が相談援助実習に臨むにあたり、面接技術の担保として客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination:以下、OSCE）が日本ソーシャルワーク教育学校連盟北海道ブロックにおいて、実習教育の質の担保及び標準化として推奨され、各養成校においてインターク面接を始めとし、

アセスメントや記録作成など種々の取り組みが OSCE として実践されている。

旭川大学においても、令和3年度より北海道ブロックの基準である評価チェックリストを用いた面接技術試験が相談援助実習指導Ⅱにおいて実施された。ただし令和3年度は、Covid-19の感染拡大により、面接技術試験の延期を余儀なくされたため、面接技術試験の実施が相談援助実習後となった。そのため、実習前評価システムの目的に合わせて事前に実施したのは令和4年度が最初となる。

今後、学生の多様化が進む現状において、実習前評価システムの充実を図るため、評価基準を確立することの重要性が挙げられるが、OSCEにおける面接技術

試験においても、臨床型の相談援助実習の形式を踏まえた面接スキルの担保としての意義が重要視される。社団法人日本社会福祉士養成校協会（2009）は、6つの実習前評価のひとつとして「定期的な知識試験」を示されているが¹⁾、渡辺（2013）は事前知識試験（CBT: Computer Based Testing）と併せてOSCEの導入が、試験に備えて学生が学習を振り返る効果があることを指摘している²⁾。また、巻・川勾ら（2014）や阿部（2016）は実習学生に対するアンケート調査から、多くの学生がOSCEの目的を理解した上で臨んだ結果、双方の調査において面接スキルが図られることを肯定的に捉えていることが示した³⁾⁴⁾。また長濱（2019）は、OSCEによる面接技術試験を体験した学生が、相談援助実習における面接評価が高くなる傾向を示しており、事前に面接技術試験を実施することは臨床型の相談援助実習の充実を図る上でも意義は高いと指摘した⁵⁾。

旭川大学では、OSCEとしての実践を今後につなげるために面接技術試験としてのスタートを切った段階であり、今回実施された面接技術試験に対する受験学生の捉え方を調査することで、面接技術試験の有効性や課題を検討し、次年度以降の面接技術試験のさらなる充実につなげていくとともに、実習前評価システムの

検討及びソーシャルワーク関連科目の教授法の改善を図ることが本研究の目的である。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象

今回の調査は、旭川大学において相談援助実習を履修している28名を対象として実施した。

2. 調査方法

面接技術試験後に調査対象者に対し、本研究の主旨・概要を口頭および書面にて説明をし、google formsによるアンケート（インターネット調査）を配信し、回答の入力を依頼した。

3. 調査期間と調査内容

調査は2022年10月に実施し、面接技術試験に関する理解及び受けたことによる効果について9つの問いを設定した。

なお、本調査の前提となる面接技術試験は2022年7月に実施したものであるが、その内容は以下のとおりである（表1）。

表1 面接技術試験の実施内容

試験時間	面接6分30秒+要約1分
クライアント	外部事業所のソーシャルワーカー（社会福祉士）
評価者	1ブースにつき教員2名配置
学生が担う役割	地域包括支援センターのソーシャルワーカー
事前情報	①あらかじめクライアントより電話にて訪問の予約を受けていること ②内容は「父親に関する相談」であること

4. 倫理的配慮

調査への協力は、任意及び無記名であり、個人が特定されないことを保障している。また、調査結果については研究以外の目的には使用しないこと、取得したデータは情報管理の徹底を行うことを書面にて説明をした。

本研究は、旭川大学保健福祉学部研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号22-07）。

ソーシャルワーカーとして面接を受ける設定とした。面接（試験）時間は一人につき6分30秒で、面接後にクライアントに対し1分以内の要約を行い、面接後に、クライアント役からの講評、教員2名（評価者）からの講評を受けて終了とした。評価項目は、クライアント役が6項目×3点（18点満点）、評価者が22項目×3点（66点満点）で合計が84点満点とした。なお、今回の試験の結果は、最高83.5点、最低59.5点、そして平均は75.1点（±6.25点）であった。

Ⅲ. 結果

1. 面接技術試験の概要と試験結果

面接技術試験は、前述の通り福祉現場で実践されている社会福祉士にクライアント役を依頼し、学生が

2. アンケート結果

調査の結果、28名中8名より回答を得た（提出率28.6%）。以下、設問ごとに結果を述べていく。

(1) 設問 1. 相談援助実習に臨む前に自らの面接技術の水準を確認する(振り返る)という面接技術試験の目的を理解できましたか

設問 1 の結果を見てみると「理解できた」5名(62.5%),「まあまあ理解できた」3名(37.5%),「あまり理解できていない」0名,「理解できていない」0名であった(図 1)。

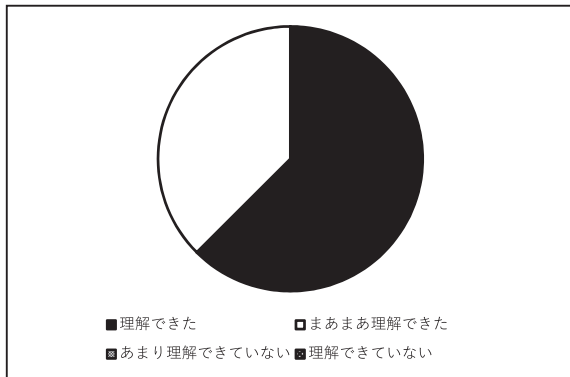


図 1

理由(コメント)

- ・実際に実習に行き面接を行うときにも活用できたと感じたから。
- ・面接の流れはわかったが、一つひとつの技術の内容が理解できていなかった。
- ・実習前に確認することもできて、実習でもロールプレイで振り返ることができました。
- ・なにも準備をせずに実習へ行くよりも、一度自分の力を確認してから行く方がこちらとしても安心できると感じたため、この目標に理解を示すことができた。

(2) 設問 2. 面接技術試験への備えとして知識学習を行いましたか

設問 2 の結果を見てみると「行った」3名(37.5%),「まあまあ行った」3名(37.5%),「あまり行っていない」1名(12.5%),「行っていない」1名(12.5%)であった(図 2)。

理由(コメント)

- ・何をしていたかよくわからなかった。
- ・やるからには事前に学習を行って面接を行いたかったから。
- ・主訴、要約などの理解が自己流だったのでもう少しみんなと理解を深めたかった。
- ・授業でならったことの復習を行った。
- ・授業時に面接試験のために学んでおくよう言われた

ことを、面接試験の直前までに資料を読んで確認した。

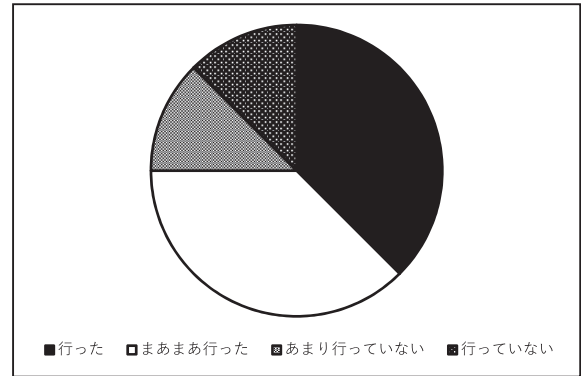


図 2

(3) 設問 3. 面接技術試験への備えとして模擬練習を行いましたか

設問 3 の結果を見てみると「行った」3名(37.5%),「まあまあ行った」2名(25.0%),「あまり行っていない」2名(25.0%),「行っていない」1名(12.5%)であった(図 3)。

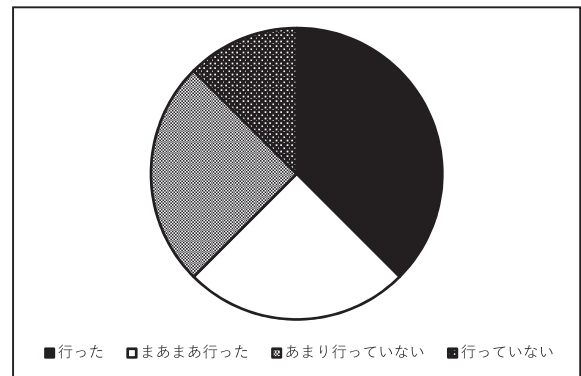


図 3

理由(コメント)

- ・実際何が聞かれるか分からず諦めた。
- ・知識学習だけではできないところがわからないから。
- ・人形相手にした。
- ・家族に協力してもらって模擬練習をした。
- ・一対一で、しっかり時間を図って、採点者を置いて…とはやっていない。友人と集まって確認事項を確認していた際に、クライアント役と支援員役に分かれて、どんな風に相談を展開していくのか頭の中で組み立てていたものをアウトプットしていた。

(4)設問 4. 面接技術試験によって自身の弱点を明確化できましたか

設問 4 の結果を見てみると「明確になった」3名(37.5%),「まあまあ明確になった」5名(62.5%),「あまり明確にならなかった」0名,「明確にならなかった」0名であった(図 4)。

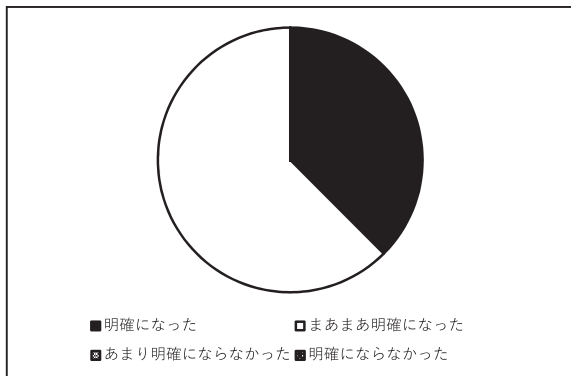


図 4

理由(自由回答)

- ・実際に試験を行ってできるところとできないところがわかったから。
- ・弱点はわかってきたが、どのように対応していけばいいかディスカッションする時間も欲しい。
- ・自分の弱点は相手との会話や適切なタイミングで行うことが出来ない所や、緊張して言葉につまる場所であると確認できた。
- ・クライアント役の方が初対面であり且つじっくりと評価を行う時間もない中であったため、「今後はここを直せばいい」というような明確な一点が見つかることはなかった。しかし、今回の事例面接試験における、私の改善点は評価表に明記されており、明確化されたといえる。

(5)設問 5. 面接技術試験によって自身の強みを明確化できましたか

設問 5 の結果を見てみると「明確になった」3名(37.5%),「まあまあ明確になった」4名(50.0%),「あまり明確にならなかった」1名(12.5%),「明確にならなかった」0名であった(図 5)。

理由(自由回答)

- ・フィードバックの際にいいところも悪いところも細かく伝えてくれたから。
- ・まだ自己肯定感が低いです。
- ・相手の話を理解して、相手の気持ちを受容しようと

いう態度で接することができるかと理解しました。

- ・今回指摘して頂いた強みは、これまでも指摘を頂いたことがあった。それらを総括して、自分の強みを考えることができた。

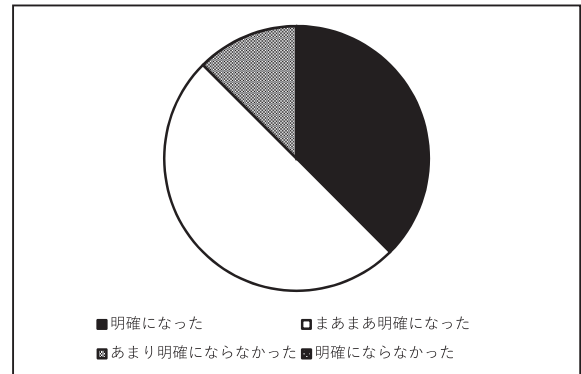


図 5

(6)設問 6. 面接技術試験は相談援助実習において役立ちましたか

設問 6 の結果を見てみると「役立った」6名(75.0%),「まあまあ役立った」0名,「あまり役立っていない」2名(25.0%),「役立っていない」0%であった(図 6)。

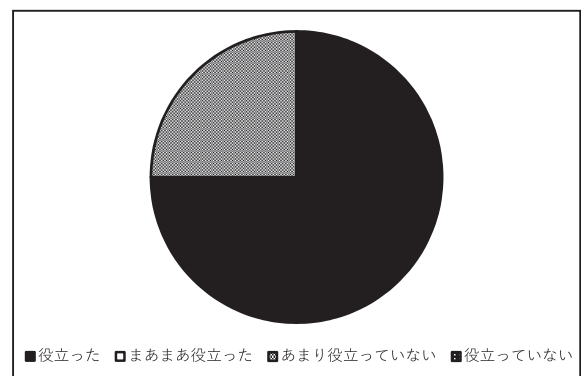


図 6

理由(自由回答)

- ・アセスメントする機会がなかった。
- ・実際に実習でも面談を行ったから。
- ・緊張はしたが、冷静に分析することができた。
- ・実習中に相談面接のロールプレイを行い、役に立った。
- ・実習で模擬面談を行う機会があったのだが、その際に過度に緊張することなく臨めたのは、今回の面接試験で経験を積めたからであると感じている。

(7)設問7. 面接時間6分30秒はどのように感じましたか

設問7の結果をしてみると「長く感じた」1名(12.5%), 「どちらかといえば長く感じた」2名(25.0%), 「どちらかといえば短く感じた」2名(25.0%), 「短く感じた」3名(37.5%)であった(図7)。

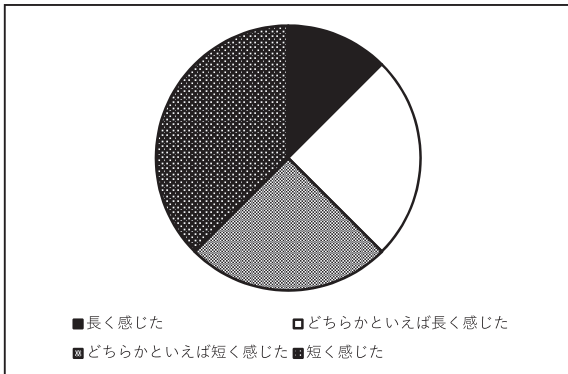


図7

理由(自由回答)

- ・緊張していたから。
- ・クライアントとのラポールを作る時間に費やした。
- ・緊張してあっという間だった。
- ・面接試験の詳細を聞いた時は長いように感じていた。しかし、試験が始まり話を聞いていく中で、どんどん質問したいことや教えてほしいことが出てきたため、気づいたら時間終了となってしまった。

(8)設問8. 面接技術試験評価で自身が難しく感じた項目はどれですか

設問8の結果を表2に示した。項目別に見てみると、7の「質問技法の的確さ」から「できなかった」とする回答が増えている。身体技法や視線の的確さでは「できた」とする回答が多くなるものの、「沈黙への対応の的確さ」「主訴の要約と確認の的確さ」「ワーカー側が沈黙に陥らなかったか」「早すぎる指示・助言等はなかったか」「メモ取りに集中していなかったか」においては、「できなかった」と自己評価をする割合が多くなる傾向にある。

表2 面接技術試験でできた/できなかった項目 (n=8)

No.	試験(評価)項目	単位: %	
		できた	できなかった
1	クライアントを迎え入れる態度	100.0	> 0
2	椅子の勧め方	100.0	> 0
3	対面の位置の取り方	100.0	> 0
4	始めの挨拶と自己紹介	100.0	> 0
5	面接への倫理的配慮	87.5	> 12.5
6	主訴の聞き取りの開始	87.5	> 12.5
7	質問技法の的確さ	37.5	< 62.5
8	言語追跡の的確さ	62.5	> 37.5
9	語りの促進の的確さ	62.5	> 37.5
10	反復技法の的確さ	37.5	< 62.5
11	確認技法の的確さ	62.5	> 37.5
12	焦点の当て方の的確さ	62.5	> 37.5
13	身体技法の的確さ	100.0	> 0
14	視線の的確さ	87.5	> 12.5
15	音声の調子の的確さ	75.0	> 25.0
16	沈黙への対応の的確さ	62.5	> 37.5
17	主訴の要約と確認の的確さ	50.0	= 50.0
18	質問攻めではなかったか	62.5	> 37.5
19	ワーカー側が沈黙に陥らなかったか	50.0	= 50.0
20	早すぎる指示・助言等はなかったか	50.0	= 50.0
21	メモ取りに集中していなかったか	62.5	> 37.5
22	不適切な表現はなかったか	87.5	> 12.5

(9) 設問 9. 相談援助実習に向けての意欲の向上につながりましたか

設問9の結果を見てみると「つながった」5名(62.5%), 「まあまあつながった」2名(25.0%), 「あまりつながらなかった」0名, 「つながらなかった」1名(12.5%)であった(図8)。

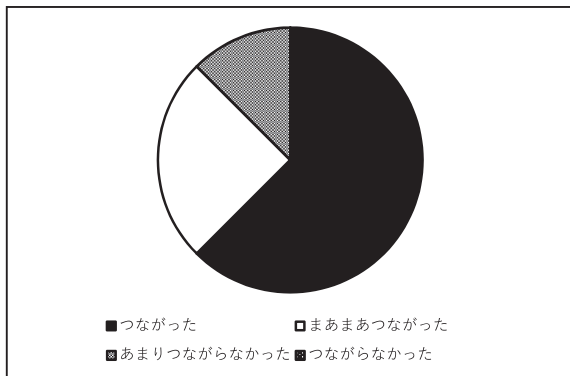


図 8

理由(自由回答)

- ・実践的な面接技術試験を初めて行って、いよいよ実習なのだ実感したから。
- ・終わった後は放心状態に陥ったが、実習で行うときにこの経験が生かされた。
- ・トラウマになりそうだったが、自分の傾向を知ることができるよい機会になった。
- ・その場ですぐ評価を聞くことができたのは、当時はとても恐かったが、今となっては新鮮なままの意見を聞く良い機会だったと思う。

IV. 考 察

面接技術試験の実施結果は先に述べた通りであり、今回の試験で著しく評価が悪い学生や再試験になった学生はいなかった。これは、事前の面接技術試験に向けた取り組みとしての講義科目(相談援助の理論と方法IV)の授業成果の結実であったことを示唆する。

そのような試験結果を踏まえながら学生が試験に対してどのように感じているかであるが、設問1の回答は試験の目的をどのように理解しているかについては、全員が、「理解できた」及び「まあまあ理解できた」と回答している。事前に面接技術試験に関する説明、その内容を伝えて事前学習につなげることができる環境を整えていたことで意識的に面接に臨むことができていたと思われる。しかしながら試験に向けた具体的

な取り組みをたずねた、設問2の「知識学習を行ったか」及び設問3の「模擬練習を行ったか」については、いずれも「行った」と「まあまあ行った」の合計が半数を超えるものの、「あまり行っていない」「行っていない」と回答した学生もそれぞれ見られる。自由回答から「何をしてもよいか分からない」「何を聞かれるか分からない」という事前の学習方法のイメージを膨らませることができていない様子もうかがえる。試験である以上、事前情報を詳細には提示していないが、「地域包括支援センター」における、「事前の電話による訪問予約」であることは伝えた。またその際、「父親のことについて相談したい」ということも伝えている。今回の結果からは、どのような相談であっても、専門職としての価値・知識・技術を意識して焦点化した学習ができるように進める必要性が示唆された。

面接技術試験を受けることによる効果は概ね感じられており、設問4および設問5において、学生自身の弱点と強みの明確化の問い掛けにおいて効果の高さが示されている。弱点については、「明確になった」「まあまあ明確になった」の回答が全員であり、それぞれの何らかの成果を得ることができている。強みについては、「明確になった」「まあまあ明確になった」が6名で、1名は「あまり明確にならなかった」としている。明確にならなかったことについては、面接後のフィードバックのあり方についての検討が必要になると思われる。学生自身が面接技術試験からストレングスを見出す視点は重要であるが、自由回答の「まだ自己肯定感が低い」との記述は、弱点に比べて強みを見出しづらいものと捉えていると感じる。客観的な視点で面接技術試験を受けとめられるようにフィードバックの向上が課題として示されていると言える。

設問6の試験が相談援助実習の場面で役立ったかについては、相談援助実習での体験がどのようなものであったかに大きく左右されるものであり、実習において十分な面接体験がなければ試験の効果が反映される機会が得られなくなると感じた。しかしながら、75%の学生は「役立った」と明確に答えており、実習における面接の体験を支える意義が面接技術試験にあると言える。

設問7における面接試験の6分30秒であるが、この設定は時間割編成上の制約による部分もあり、当初の予定をしていた7分より30秒減じた。当初面接時間を7分と設定した根拠として、北海道ブロック社会福祉実習研究協議会による「北海道のソーシャルワーク実習」でインテーク面接の展開例として示された面

接時間を参照したためである。OSCEによるインタビュー面接時間を7分とした巻・川勾(2014)らは、OSCE実施後の学生調査から7分が「適切であった」59.6%と「まあまあ適切であった」12.3%と7分という評価結果を示している³⁾。そのため、面接時間を短く感じる学生が多いのではないかと思われたが、結果として、「長く感じた」学生が37.5%、「どちらかといえば長く感じた」学生が25%と長く感じる割合が半数を超えている。学生によっては、面接の導入における自己紹介や倫理的配慮の説明など、主訴の聞き取り開始までに要する時間が長い学生もいたことから、主訴の聞き取りに費やす時間の個人差における課題が感じられた。

設問8の試験評価項目において難しく感じた内容については、具体的な面接技術における項目が多かった。長濱(2019)は、相談援助実習の場面における面接を北海道ブロックの推奨する評価表に基づいて実施し、評価項目の①～⑥を面接の導入、⑦～⑩を主訴の聞き取り技法、⑪～⑭を面接の態度としているが、主訴の聞き取りに関する項目の評価が低くなる傾向を示している。これらは事前学習で学びを深めることの難しさを示すものであり、併せて実習の現場におけるソーシャルワーカーの面接場面での同席・見学、臨床場面での実習生自身の実践による学びが大きいことを示しているとも言える⁵⁾。

設問9の「つながった」62.5%、「まあまあつながった」25%と面接試験の効果を示す結果であるが、1名の学生が「つながらない」としているため、つながらない理由を検討していくことの必要が感じられた。

V. まとめと本研究の限界

8名のアンケート回答によるデータ集計のため、精度の課題があるものの、面接技術試験の実施は相談援助実習に臨むにあたっての一定の効果につながっていることが示された。

面接技術試験の目的を理解し、そこから意欲の向上につながるなど、面接技術試験を実施する重みを知ることができた。そのことから課題とされる部分を洗い出し、新たな面接技術試験のあり方につなげることができるものである。そのためにも、教学レベルでの検討を通して、どのように日々の学びに反映させるかが問われる。また、試験における効果が相談援助実習の場面で発揮できるかは実習の受け入れ先の実習プログラムの内容に影響を受けることも示された。設問6の

「面接技術試験は相談援助実習において役立ちましたか」の回答が、役立ったが6名(75.0%)とあまり役立っていない2名(25.0%)と、実習体験において活かされなかった学生が2名いた。特に、自由回答の「アセスメントする機会がなかった」は、実習プログラムのあり方の課題と言える。これは相談援助実習のプログラムに対して学生の作成した実習計画書との擦り合わせの重要性が示されており、実習先と教育側の連携協働の充実した取り組みの構築が求められるものである。近藤・巻ら(2016)は、実習指導者へのアンケート調査からOSCEの結果を実習指導者の58%が何らかの形で活用しているとしている一方で、半数近くが活用していないことを示し、その課題としてOSCEの結果の共有を通して実習生が自己覚知を深めていけるような仕組みの必要性を述べている⁶⁾。

今回の面接技術試験は、実習に臨む学生に焦点を当てて、面接技術の担保を目的としており、面接技術試験の実施内容及び学生の評価結果を実習指導者に開示はしていない。しかし、本研究を進めていく中で、面接技術試験で得られた結果を実習指導者とも共有し、実習体験を通して学生の持っている弱点を軽減させ、強みをさらに伸ばしていく実習指導のあり方が示唆された。川勾・巻ら(2016)は、OSCEは学生の知識・技術・価値の習得状況を確認するためのものであり、補完する機能はないと述べているように⁷⁾、実習における面接技術の担保については、技術試験実施以前、つまり養成教育を開始させた段階から相談援助実習に向けた学びをOSCEにて確認していくものである。

社会福祉士資格に関する実習は、今までの相談援助実習からソーシャルワーク実習としてあらたなスタートを切ったばかりである。今後、高い実践力を有する社会福祉士を養成するためには、大学における養成教育のさらなる質的充実が求められる。そのためには、これまで以上に実践現場との連携を強化しながら、実習を展開していかなければならない。

注・引用文献

- 1) 社団法人日本社会福祉士養成校協会編：相談援助実習指導・現場実習教員テキスト、中央法規出版、201、2009
- 2) 渡辺央：相談援助実習の実習前評価についての実態、東京成徳大学研究紀要－人文学部・応用心理学部－(20)、165-172、2013
- 3) 巻康弘・川勾亜紀奈・福岡麻紀・近藤尚也・大友芳恵・鈴木幸雄：相談援助実習におけるOSCE(客観的臨床能力試験)の開発～実施結果と学生アンケート調査から～、北海

- 道医療大学看護福祉学部紀要 (21), 1-10, 2014
- 4) 阿部好恵：短期大学における実習前評価の検討－「実習前評価システム（短期大学版）」の試行的実施から－，帯広大谷短期大学紀要 (53), 1-9, 2016
 - 5) 長濱章雄：相談援助実習におけるインテーク面接に与える OSCE（客観的臨床能力試験）体験の効果～チェックリストを用いた技術評価からの考察～，最新社会福祉学研究 (14), 85-92, 2019
 - 6) 近藤尚也・巻康弘・川勾亜紀奈・福間麻紀・松本望・鈴木幸雄：相談援助実習における OSCE 結果の活用実態－実習指導者へのアンケートから－，北海道医療大学看護福祉学部学会誌 (12-1), 99-103, 2016
 - 7) 川勾亜紀奈・巻康弘・福間麻紀・近藤尚也・松本望・鈴木幸雄：相談援助実習に向けた実習前評価システムとしての OSCE（客観的臨床能力試験）の企画・運営－事前準備の内容とその変遷を中心に－，北海道医療大学看護福祉学部紀要 (23), 79-86, 2016

参 考 文 献

- 北海道ブロック社会福祉実習研究協議会：2011 年度北海道ブロック実習前評価システム OSCE 実施マニュアル，資料集 北海道のソーシャルワーク実習，115-173, 2011 *
- 巻康弘，近藤尚也，川勾亜紀奈，福間麻紀，松本望，鈴木幸雄：相談援助実習における OSCE（客観的臨床能力試験）試験項目の評価－学生及び評価者の調査結果から－，北海道医療大学看護福祉学部紀要 (23), 33-40, 2016